

# Weekly Survey

現在チベットは中国領だが、民族的・文化的には異質な存在。亡命中のラマ教主ダライ・ラマを中心に「中国」への同化を拒否し抵抗を続ける。歴史を振り返りつつ今回の反乱を考えたい。また、欧州の通常戦力削減を目指す東西交渉始動が意味するものは？

中嶋嶺雄

## チベットの反乱再び

*TIME* には、「これこそ *TIME* だ」と思わせる記事がしばしば掲載される。今週号の Asia/Pacific 欄のチベット反乱をめぐる報道、“Protest and Repression” (pp. 8-10) は、まさに圧巻であり、残念ながらわが国のメディアには、このような記事は見当たらない。中国人（漢族）の支配からの自由を求めて、中国当局とその官憲に対し果敢に抵抗するチベット民衆の姿をとらえた4枚の写真も生々しく、今日のチベット問題の核心を浮き立たせている。

*TIME* が報道の自由の精神に立脚して、ここまでリアルに取材し、解説できるのに、わが国のメディアに

はなぜそれができないのだろうか。その第1の理由は、問題をあくまでも中国の内政だとし、反乱は「一部の分離主義者 (a handful separatists)」(p. 8) が企てたものだとする中国当局に対して、わが国のメディアがいまだに「Press の自由」を確保し得ていないからである。第2には、このところチベット民衆の不満が現地ではさらに募っており、先週は1959年のチベット動乱30周年に当たるというのに、現場に *TIME* の記者のような問題意識を持ったリポーターが居合わせなかったからであろう。

よく知られているように、チベットは、歴史的にも民族的にも、そして文化的にも宗教的にも、漢族が支配的な中華の世界とはまったく異質であった。他民族を文化的にも同化し、融合し、また影響下に置いてきた長い歴史と伝統を有する「中国的世界」において、儒教の影響がまったく及ばなかった周辺領域こそ、ともにラマ教を信仰するチベットとモンゴルであるという事実は、あまり気づかれていない。

そのチベットは、「五族協和」、つまり、漢・満・回(ウイグル)・蔵(チベット)・蒙の融合をスローガンにして中華民国を形成した20世紀初頭の辛亥革命(1911年)以降においても、漢族との同化を拒否してきた領域であったが、1949年の中国革命によって成立した中華人民共和国の派遣した中国人民解放軍によって翌1950年秋に「解放」された。こうして社会主義中国の版図として確定されたチベットに対して、中国当局は少数民族の自治の尊重を唱えてきたけれど、それが真実のものではなかったことは、中印対立の原因にもなったチベット動乱で証明され、ラマ教の教主ダライ・ラマはインドに亡命して今日に至っているのである。

チベットの態度を示すものとして最近では、1987年9~10月にチベット自治区の首都ラサで、チベット人



「否」を叫ぶチベット人

2000人以上が暴動に走り、次いで88年3月上旬以降、再び大規模な反乱が起こって「チベット独立」を叫ぶラマ僧らが中国当局や人民解放軍によって多数逮捕された。そして今回の反乱である。

中国当局は、チベット族に対する文革期の強圧策への自省もあって、ここ数年はチベット優遇策を講じてきたものの、一方でチベット自治区への漢人の大量移入が進み、チベット人の雇用の機会は大幅に減少してしまった。加えて、外貨収入を図る

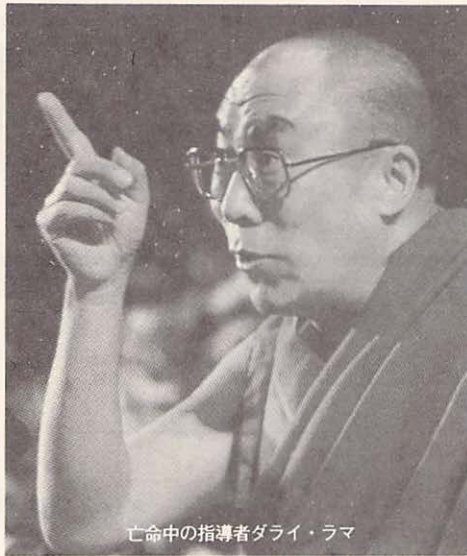
ための「チベット観光」が始まり、ラマ教寺院の修復も図られはしたが、反面、ラマ教の布教の自由を奪ったままチベット人政治犯を過酷な状態に置いているという現実があるのである。つまり、漢民族のチベット支配という構造はまったく変化せず、*TIME* のいうように、「抑圧－反乱－抑圧 (repression-violence-repression)」が繰り返され、ダライ・ラマ亡命政府の主張によれば「1983年までの40年間に120万人ものチベット人が、チベットへの中国の侵略と占領の直接の結果として死んだ」(p. 9) ののである。

ダライ・ラマは、*TIME* のニュー・デリー支局長 E. W. デズモンドの質問に対し、「たぶんわたしたちは中国人と共存してゆく方がよいでしょう。ただし、完全に平等だというのであればです」(p. 10) と答えて、いつもの彼がそうであるように「独立」という言葉を慎重に避けている。亡命先で祖国の悲劇を思う苦悩を読み取ることができよう。

いずれにせよ、日中友好体制下にある日本人として、今日のチベット反乱をどのように考えてゆくべきか、きわめて重要な問題だといわねばなるまい。

## 欧州通常戦力交渉への期待

“Let's Count Down” (pp. 12-14) と “Real Weapons, High Hopes” (p. 14) は、中距離核戦力 (INF) 撤廃に次いで新たに開始された通常兵器削減を目的とする欧州通常戦力交渉 (Negotiations on Conven-



亡命中の指導者ダライ・ラマ

tional Armed Forces in Europe 略称 CFE) に関する記事である。ウィーンの旧王宮ホーフブルク (Hofburg) でのベーカー米務長官とシェワルナゼ・ソ連外相との会談でスタートを切った CFE だが、そのウィーンといえば、周知のように1815年にウィーン会議が開かれて19世紀ヨーロッパの協調外交 (concert diplomacy) をもたらした由緒ある地である。その後、20世紀に入ると帝国主義列強の利害対立からヨーロッパの協調が崩れ、第一次世界大

戦へと突入していった。大戦後の20年代はいわゆるウィルソンの理想主義の時代となったけれど、30年代には全体主義の台頭を招き、人類は第二次世界大戦という惨事を再び迎えた。

国際関係論 (International Relations) という新しい学問の創始者 E.H. カーは、その20年代と30年代を古典的な名著『危機の20年 (Twenty Years Crisis 1919-1939)』の中で克明に分析し、理想主義の持つ欠陥を指摘している。今回の CFE の開始は、いよいよカーのいうユートピアリズムからリアリズム (現実主義) へと時代が大きく転換しつつあることを示しているともいえよう。戦後45年目にして、いよいよ新たな

形での協調外交が開幕するものと期待したい。



ウィーンに臨む米ソ両外相

●  
今週の *TIME* のヒット記事に目を奪われて、チベット問題について多くの紙数を費してしまったが、今週のカバーストーリーは、*TIME* にしては珍しい遺伝子の問題である “The Gene Hunt” [pp.

32-39]。内容的に多少専門的ではあるが、理数系の学問を勉強している学生諸君などは、こうした記事を通して専門用語 (technical term) の表現に慣れ親しむには絶好の記事であり、総合雑誌 *TIME* の面目躍如たるものがある。

(なかじま みねお/東京外国語大学教授)

# T I M E

## C O N T E N T S



タイムマラソン

MARCH 20 1989

ALC PRESS Inc.

### 2 Weekly Survey

中嶋嶺雄

### 4 Checklist

### 11 Selected Articles

#### ●World

#### 11 Let's Count Down

— ウィーンで順調なスタートを切った欧州通常戦力交渉

#### ●United States

#### 14 Spying and Sabotage by Computer

— 米ソによるハイテクスパイ合戦が激化

#### ●Science

#### 17 The Gene Hunt

— ヒトをつくる遺伝子の謎に挑む科学者たち

#### 24 The Perils of Treading on Heredity

— 遺伝子工学の進歩で人間が神の役割を演じることの危険

#### ●Business

#### 28 A Deal Heard Round the World

— タイムとワーナーの合併で世界最大の情報・娯楽企業誕生

#### ●Interview

#### 31 One Bear of a Soviet Politician

— 論争に敗れ地位を追われ、政治的復活に挑むエリツィンがその心意気を語る

### 35 実践講座

"No Mud Touches Me"

— ギリシャ版「リクルート疑惑」でババンドレウ首相が窮地

### 35 TIME Commentary

Politics

アフガニスタン情勢の今後

Economy

FRB のサジ加減

Art

回顧展がもたらした新たなゴヤ像

角田正美  
坂本弘樹  
矢口國夫

S C O P E